

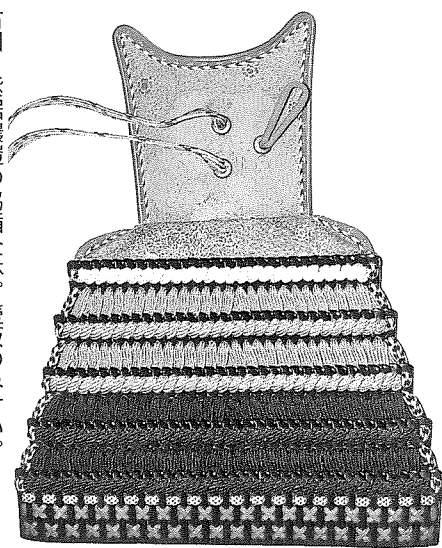
# 〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ21 国指定 紫裾濃鎧の脇楯

日本風俗史学会会員 齋藤 慎一  
前青梅市文化財保護審議会会長

大鎧の胴は、着脱と右手機能を考慮して、右脇部分を胴から分離し「脇楯」とします。

脇楯はこの右脇部分の「引合」に胴を着用する前に「腰緒」であらかじめ着用しておくこととなります。

脇楯は右脇腹から腰のくびれを防禦する「壺板」という鉄板（「金具廻」）、その下部



右図 紫裾濃鎧の脇楯全体。壺板のみ古い。

に「蝙蝠付」という台形の「韋」で取付けた「馬手草摺」で構成されます。

壺板は大鎧の鉄板部品として最大で、運動機能・負荷を考えて、上・下の縁や四隅の複雑な外反、全体の縦と横への曲面、上・下の刳の輪郭など微妙で立体的造型部分です。平安時代の壺板は中央に縦

二孔（穴）の「二孔式」で、京都の法住寺合戦遺蹟出土の最古の壺板は全高34.0cm、中央高29.0cm、最大幅29.8cmと大きく、裾広がりです。鎌倉時代の紫裾濃鎧の壺板は表面中央に縦に二孔、その右（前側）



上図 壺板裏面。僅に裾すぼみ、輪郭は古様。下端左右には腰緒の縮

高（全高）26.6cm、後方26.6cm。上縁のひらき幅20.0cm、下縁では17.5cm。蝙蝠付の韋の辺の幅17.0cmだから、一度少しすぼまり、またひらきます。全体としては下方へ僅にすぼまる型で、腰でしまる鎌倉後期の鎧の胴への傾向を示します。輪郭はなお古様で、二孔式の終末期の厳島神社蔵黒系威鎧に似ています。一方蝙蝠付の韋の下に隠れてしまう壺板下部には鎌倉中期を下らない古い牡丹襷・霞地獅子丸文の絵韋が、紺と紅の色鮮やかに残ります。厳島の黒系威の絵韋に似てやや硬直した獅子の姿態、

類型化した牡丹は、二孔式の黒系に一時代遅れる点で壺板の年代と相応します。下端より5.8cm上で、左右の覆輪花先型が突合せとなり、鍍銀は鮮明に残ります。上縁中央上部の覆輪に花先型はありません。古い絵韋の下縁には小縁がなく、左右小縁は新補です。紫裾濃の壺板は「三孔式」で、三孔式の古い例は春日大社蔵片身替逆沢瀉威鎧（以下逆沢瀉）や都々古別神社の壺板で、紫裾濃はこれにつづく例です。

古い年代の「二孔式」は法住寺、唐沢山の鎧で、御嶽赤系、厳島黒系という順です。そして三孔式では、中央の縦二孔の間隔と前方一孔との距離が正三角形に近づくほど年代下降の特徴とされます。御嶽紫裾濃が縦の間隔5.0cm、二辺が4.5cm、古い三孔式春日逆沢瀉は縦2.5cm、前各6.0cmで

に一孔、計三孔「壺孔」がある「三孔式」です。縦の二孔は「壺縮」になります。ここで胴の長側一段目の前縁、後端から各一条出る「引合緒」を結び合わせます。壺孔には鍍金の裏菊座、鍍金の小刻座、鍍銀の玉縁の三重の鷓目金物を嵌め、壺板には鍍銀の「覆輪」をかけて装飾します。壺板の上縁からこの上の孔の中心まで6.5cm、二孔の孔の中心は5.0cmを隔て縦に並びます。この上下の孔には、「伏組」縫いの丸ぐけ五星赤韋緒で縮を作り、鍍金か鍍銀の菜萸金物を通すべきです。しかし明治三六年の美術院の誤った修理により、孔から用途不明の亀甲平組の緒を各一条ずつ出すのが現状です。

縦の二孔の前側の一孔は、縦二孔各孔の中心から斜めに4.5cmの丁度二等辺三角形の頂点の位置にあります。この三孔は年代下降して正三角形をつくる距離になる前段階を示すから、御嶽紫裾濃の方が年代が下るといふことです。また古い年代の法住寺出土品や唐沢山や御嶽の赤系威鎧の壺板は、大きく、上幅より下幅がひらきます。しかし鎌倉期以降は次第に小型化し、裾すぼまりになります。黒系威は二孔式の最後で、逆沢瀉は三孔式の最初とされ、都々古別や紫裾濃が続きます。黒系威と逆沢瀉は鎌倉期への端境期、移行期の制作ですが、両者は全体に裾すぼまり傾向で、蝙蝠付の孔の辺では少し狭く下辺で少し広がる型です。蝙蝠付韋の綴穴は、この辺がせまくなる逆沢瀉や紫裾濃は五対一〇孔と少ない孔数です。壺板下部両端の腰緒の穴は、紫裾濃では前一孔、後二孔で、黒系威・逆沢瀉は前後共各二孔です。

壺板は、鎧を飾り付けると大袖や蝙蝠付韋にかくれて観察しにくいのですが、鎧の年代を示す重要な部分です。

します。この前側一孔と壺板前方下端の角の小刻、玉縁を嵌めた孔の緒で、腰緒をかけて引き戻す縮を作ります。

脇楯を腰に装着するにあたり、下縁後方の角の二孔（小刻座、玉縁の鷓目金物）でつくる縮に付けた懸緒と待緒のうち、まず懸緒を後方から前へとり、この腰緒の縮にかけて、引戻し待緒と結ぶのです。だが、これも修理を誤り、縦二孔の前方の一孔には丸ぐけ赤韋の縮を出すだけです。

さて、壺板の上縁から15.3cm、下縁から4.7cmのあたりに、上辺23.8cm、下辺28.0cm、高3.6cmの台形の「蝙蝠付の韋」を赤韋で綴じ付けるため、横に二対五箇所の小孔をあけます。五星赤韋の小縁、藻獅子の絵韋すべて明治の新補で、左右の赤韋小縁に打つべき小刻座付笠鉾各二箇を打ちません。

壺板全体の寸法は、上縁3.9cm割り込み、下縁2.4cm割り上げ、中心での高20.5cm、前方側の狭い馬手の草摺は、五段の小札板の一段目の白糸の縄目で蝙蝠付韋に綴じ付けます。他の三間が鉄札ませなのに、すべて革札です。残念ながら全体新補で、蝙蝠付韋の裏面の下辺に打った五箇の小刻座付の笠鉾の右端一個のみ旧物です。革札五段各段の長さ、小札数は、一段目29.0cmで二八枚、二段目は31.8cmで三一枚、三段目34.4cmで三四枚、四段目は37.4cmで三七枚、五段目菱縫板40.2cm四〇枚です。威糸は一段目の縄目は白糸で、以下黄、薄紫、濃紫、濃紫です。享保一一年（一七二六）九月調査

「武州御嶽鎧図」に描く、白糸縄目の上の三対の八双鉾は復元されていません。脇楯上縁中央から菱縫板まで全長46.0cm、重量1.85kgです。計測数値と位置付けは、この鎧の調査の中心である山岸素夫先生に筆者が随行して各地でご指導頂いた学恩です。